

# PHD LETTER

## 79

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

2001・6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
編集人：藤野 達也  
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3  
元町アーバンライフ202  
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867  
e-mail phd@po.hyogo-iic.ne.jp  
定 価：100円

- 古参職員フジノに聞け！  
「アイルバングスの漁師はどこへ？」…………… 3P
- 研修生レポート…………… 4-5P
- ソディ通信…………… 6P



熱帯のアジアの村は  
ふつう、暑い。  
その上に影も短い炎天下なら  
もっと、暑い。  
そこで鉄を溶かして、クワづくり。  
野鍛冶の仕事は  
もう究極の暑さ。

ビルマ、マンダレー近郊 撮影：FUJINO T.



## 東西南北 問題解決 取組日記

3月×日

20年の活動のうち、初めて新潟県でお話させてもらう。会員の森チエ子さんが昨夏のスマトラツアーに参加され、よりPHDに惚れ、今回のお招きにつながった。日頃、痴呆症老人の介護の活動をされている糸魚川の方々50人を前にスライドとお話。老人介護と国際協力、一見縁遠いように見えるが活動の根底にある考え方に共通点がある。研修生がお邪魔するにはちょっと遠いけれど、PHDの考え方がこちらでも広まってほしい。

初夏には下関、島根県浜田からもお声がかかりお話やワークショップを予定。神戸から遠くてもご希望があれば出向きます。ご相談を。

3月〇日

毎秋、講演・ワークショップで訪れる名古屋の南山短期大学から相談があり、学生2人の実習を3週間引き受ける。はじめの1週間はオリエンテーションが神戸の事務所で実習。その後、18期生のフィリピン、ヌエバエシーハ州ガバルドンでの比較研修に同行。PHDのカウンターパート、SAFRUDIのすすめる地域組織化

の取り組みを体験した。日本に戻り、まとめをして、合わせて3週間の実習。これは単位として認められるそう。



前後して神戸の頌栄人間福祉専門学校からも2人がやってきた。彼女たちはこの5月から北タイでの4ヵ月の実習が予定されており、その下調べも兼ねての合計2週間。うち1人は、研修生ポーディさん、ブンシーさんの村にしばらく滞在する予定。短期の滞在ではわからない村の様子を調べることも期待しての派遣となる。

この4人以外にも2000年度は関西国際大学、神戸YWCA学院専門学校、大阪YWCA専門学校から実習生を、さらには、神戸市教育委員会から教員の研修の受け入れを行った。PHDの人材育成は海外の人ばかりではなく、国内にも目を向けている。2001年度は国内研修生を6月から受け入れる予定で面接を行う。ここに登場したのは教員研修のSさん以外はすべて女性。

## 会費納入と会員増強のお願い

この6月、PHD協会は設立20周年を迎えることができました。20年間みなさまからいただいた暖かいご支援に、心より感謝申し上げます。

ここ数年、PHDをはじめとした国際協力NGOを取り巻く状況の急激な変化とその厳しさについて、PHDレターなどを通してお伝えしてきました。こうした状況下、事務局も財政について会員みなさんにご負担のお願いばかりしてきた訳ではありません。例えば助成金について、その内容と性格を検討し、PHDの活動に相当であると判断できるものについては申請するなどの努力を続けています。

しかし、こうした厳しい状況だけ

らこそ、PHDの活動基盤である会費収入をより一層強化し、21世紀を迎えた今年を新しいスタートの年と位置付けて進んでいきたいと考えています。

助成金が収入の大半を占めるNGOも多い中、またこの数年の「逆境」下を通じて、PHDの会費収入が毎年ほぼ変わらぬ金額であったことは、大変ありがたいことであると同時に、ある意味驚くべきことです。PHDが会員みなさんのご意志により運営されていることの証しであると思います。20年の節目に、この輪をさらに広めるために、現会員の方には、今年度の会費納入に加えて、PHDを周囲の方にもお薦めいただき、新入

5月〇日

20周年記念事業実行委員会は一転して男性が多い。中心メンバーの奥西、柿原、久保、原野さんが週に2、3度集い、準備を進めている。事業の目玉は何といても10月6、7日のシンポジウム、20年の中で日本で学び、村に戻り、コツコツと活動を続けてきた研修生の代表を数人招くこと。その人選をすすめていく中で感じることは、やっぱり活動の成果が見えてくるのには時間がかかることだ。現在候補にあがっている人は、82年1期生バート・ピスタさん（ネパール）、83年2期生ラダさん（ネパール）、85年3期生プリチャーさん（タイ）、87年5期生アリさん（インドネシア）、90年8期生ヘルペさん（PNG）、93年11期生ティンアンウィンさん（ビルマ）等。必ずしも華やかな成功例だけでなく、苦労や中には失敗例についても話をしてもらおうと考えている。6、7日だけでなく前後の期間にできるだけ多くの皆さんに出会っていきたく思う。こちらの方にも皆さんからお声をかけていただきたい。元研修生の滞在日程は人によって異なるものの、1～4週間を予定。

総理事代  
藤野達也

会員を増やすことにもご協力いただければ嬉しく思います。

また、今年度より友の会会費を年額500円以上任意の額から、1,000円以上の任意の額へと変更いたしました。これは、みなさまに年4回お届けする会報の製作費と郵送費が500円では赤字となるため、この度、金額の引き上げをいたしました。こちらについても重ねてご理解を賜りたくお願い申し上げます。

アジア・南太平洋の草の根の交流を21世紀も継続していくため、みなさんによる会員制度強化へのご協力を何卒よろしくお願ひいたします。

## “古参職員フジノに聞け！”

### 第5回「アイルバングスの漁師はどこへ？」の巻

編集部（以下編）：いよいよ20周年ですね。この20年の成果といえば何でしょうか。

藤野（以下フ）：まずは、ここまで続いてきたことが大成果だと思いますけど、それは逆にいえば提唱者岩村先生の呼びかけ「共に生きる社会」がまだ実現していないということで、成果があがっていないとも言えます。そう言ってしまうと話が広がりすぎとも思いますけど。

まずPHDのやっていることは人づくりですよ。これって形として見えにくいし、数値で測ることは難しいものです。

編：でも、人数や日数で出せるのではないですか。

フ：それで皆さん満足できます？1年の研修を終えるだけでも大変なことですが、研修の後村に帰って、村づくりにどう取り組んで、それが役立っているのか。そこを見にほぼ毎年、帰った研修生を訪ねその後の彼らをフォローしています。

編：その結果はどうなんですか？帰ってから行方知れずの人なんかもあるんじゃないですか。

フ：PHDの研修生はご存知の通り毎年4人くらい、短期の人を入れても10人くらいですよ。このことからそれっぽっちと思われることもありませんが、逆に少なく、濃くという感じで、少なくとも1年の滞在のレギュラー研修生はほぼ全員どこで、何をしているのかわかっています。その上でまとめれば、研修生はそれぞれに取り組んでいます。けれども2年や3年でいい結果を出すことはなかなかできないし、時間をかけたからといって必ずしも成功が約束されているものではないということです。

編：そんな難しいことにエネルギーを注ぐより、もっと別のやり方で村を良くできないのですか。

フ：それって、何ですか。

編：例えば、建物を造ったり、機械を持って行って見える形でやった方が分かりやすいし、効果もあるんじゃないですか。

フ：建物や機械がいらないと言っているわけではありませんが、それを誰が必要と考え、どう手に入れ、誰のためにどう使いこなすか、そこがより大事だと考えているのです。その地域を作っていく人の動きを作っていく。その担い手を育てること。それが、岩村先生のネパールの経験の反省から出たPHDのアイディアだったはずですよ。お金やモノも必要だけど、それを必要と感じたら、それを手に入れる方法も考え、手に入れたらそれを使いこなす、そんな人の輪が基本だと思うのです。さらにすぐの効果を狙うのなら、村で力を持つエリートや地主、お金持ちを研修生に選んで帰せば、影響力というか強制力、さらにモノ、金も伴うでしょうけれど、今その村で困っている弱い人の立場で考え、行動できるのかは？です。ひよっとすると力を持っている人の存在が問題なのかも知れないですよ。

編：また熱くなってきますね～。

フ：あんたが煽ったんでしょうが。ただし、今までのやり方で全て良いではなく、もっと効果があがりやすいやり方、フォローアップの仕方があるだろうと思います。そのためには、うまくいっていないところを分析していくことが必要です。

編：どこか例をあげて話してほしいのですが。

フ：まずは、こちらのねらいに合った研修生を招くことがポイントです。インドネシア西スマトラ州の漁村アイルバングスがあります。1986年から付き合いが始まりましたが、当時はまだスハルト政権が強く、インドネシアではNGOの活動は極めて限定されていたし、ましてや外国人が観光地以外の村に入るには、その地域のお役所に仁義を切ってからでない

とできない。そこで日本に留学経験のある地元の国立大学のシャリフ・アリ先生を窓口にして、村の推薦を受け、その上でこちらが面接を行って人を決めた。そこにはさほど問題はなかったのですが、研修内容が漁業だったのです。選ばれてやってきた3人はヤル気に満ちた若者で、日本各地で親身になってお世話いただき、熱心に研修をしましたが、現在1人もアイルバングスで漁業をしていないのです。かろうじて1人は村にいますが、食堂経営が主な仕事。あとの2人は村を出て漁業からは離れてしまっています。その先では彼らなりに日本での経験を活かして努力していますが直接は研修内容が生きてない。大きなところでとらえれば、日本の経験は生きているのでしょうが、とりあえずこちらが期待した「村で」「漁業で」は実現していない。これには漁業をこちらが十分に理解できてなかったのが理由です。彼ら3人は自分の船を持たない雇われ漁民。彼らが1年学んでも所詮雇われ、しかも発言力の弱い若者。自分の意志で漁をすることはできない。ここに気付いていなかったのです。事実もう一つの漁村パシルバルーから招いた2人は自分の船を持って自分の意志で漁を工夫できる人。彼らはそれなりに日本での経験を活かして漁業を軸として村づくりの取組ができています。

編：そうすると日本での研修が帰ってから生かせる条件にあるかが見えてなかったのですか。

フ：そうです。それと漁業の研修が装置、機械、基盤整備によるところが大きいのも、しんどかったところですよ。言い換えればPHDの研修システムに合にくいものだったと思います。もう一つは、3人同時に呼んだのも良くなかったと思います。修正がきかないですから。PHDは小さなNGOで全ての状況に対応できる研修を用意するところまでいっていませんから、実力に合った研修とそれに合わせた人と地域選びが必要ということです。

編：もう少し、期待通りにいっていないところの話を次回に聞かせて下さい。



# 研修生レポート

# 19期生・ホストファミリー紹介

## アルウィ・ファドリさん

(インドネシア/男性/28才)

西スマトラ州ソロ郡タベ村出身。タベ村からはダスウィルさん(99年度)、アフダールさん(00年度)に続く3人目の研修生です。村は標高1,100mに位置し、最高気温約26℃、最低気温は約15℃です。政府の貧困度ランクでは最下位に指定されていますが、日々の食事に事欠くほどではなく、村人たちは穏やかな生活を営んでいます。



棚田と牛とモスク

生活は農業が中心で、主食の米は自給用。唐辛子やサトウキビから作る黒砂糖を売っています。最近村に入ってきた農業や化学肥料を業者に言われるまま使用し始めましたが、その成分や弊害についての知識はほとんどありません。

両親と6人の兄弟(本人は長男)からなる9人家族。敬虔なイスラム教徒です。

### ◆梶原正徳・早苗さん宅

(神戸市東灘区)

「PHDの研修生なら毎年だって受け入れたい」と言って下さる梶原さん宅には、92年以来今回を含めて6人の研修生がお世話になってきました。

すっかり家族の一員のアルウィさん、ゴールデンウィークには、地域のだんじり祭りにも参加させていたいただきました。



## ケユーン・カヨータさん

(タイ/男性/28才)

タイの中で最も貧しいと言われる東北部、カラシン県クッタカイ村出身。この地域は、乾季に水が得にくく、多くの農民が年1回の稲作しかできません。そのため農閑期の出稼ぎが日常化しており、最近では台湾などへ働きに出る村人もいます。



台所に並ぶ蒸籠

また、村人のほとんどが借金を抱えていることも問題です。トーコーソーと呼ばれる政府系農業銀行から年利10%以上で1家族約2~10万パーツ(1パーツ=約2.7円)の借金をしています。

過去の研修生たちが始めた養豚業が、中国からの安い豚肉の流入によ

り停滞。そのグループの活動を活性化するため、昨年度のノパドンさんに続いての来日です。

家族は両親と妹1人。宗教は仏教です。

### ◆葛原時寛・香織さん宅

(神戸市垂水区)

PHDとは2年目のお付き合いになる葛原さん宅ですが、通算ではホストファミリー歴16年、受け入れ人数もケユーンさんで18人目になります。

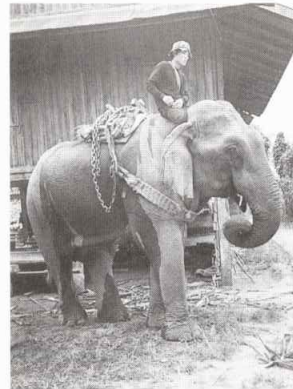
「とても自然に色々お手伝ってくれる」とお母さん。今は葛原さんの田んぼで一緒に田植えをするのを楽しみにしています。



## ナロンテッ・カムヌーンパナドーンさん

(タイ/男性/20才)

タイ北部、メーホンソン県バンペー村出身。この地域からは6人目となる山岳民族カレンの青年です。村では、お米、大豆、ニンニク等を主に作っています。トマトやエンドウ豆といった野菜も作りますがほとんど自家用。この地域では農業や化学肥料がかなり浸透していますが、使用法については政府の指導員に言われるままという状態です。



ナロンテッさんの親戚の象

サワンさん(98年度)を中心に有機農業を村に広めようという農民のグループはありますが、まだ試行錯誤の段階です。

電気は4年前にきて、今ではテレビ、炊飯器、冷蔵庫などの電化製品が家にあります。お兄さんと弟の3

人兄弟で、仏教徒です。

### ◆二星憲生・幸恵さん宅

(神戸市灘区)

長期にわたる受け入れは初めてという二星さんですが、「特に困ったことはないし、むしろよく手伝ってくれるので助かっています。」とのこと。

キムチが大好きなナロンテッさん。最近では味の違いにこだわるほどだそうです。



## シコン・ドンさん

(バプア・ニューギニア/女性/22才)

バプア・ニューギニア東端の半島にあるモロベ州フィオ村出身。リンダさん(00年度)の隣村です。ただ、「隣村」といっても、歩いて2時間の距離。私たちにかなり「遠い」ですが、バプア・ニューギニアでは「近い」距離に入ります。

村の人口は約300人。水は川から汲み、調理は薪でします。電気はなく、灯りには灯油を使っています。農業が生活の中心で、ヤムイモ、タロイモ、バナナ等は自給用。コーヒー、カカオ等を売って現金収入を得ています。

乳幼児の死亡率が高かったり、日々の食事が栄養の偏ったものになっていること等が村の問題です。

両親と兄、妹、弟の6人で暮らしています。ルーテル派のクリスチャンです。



各地に残る日本軍の戦跡

## ◆光田弘・和子さん宅

(神戸市西区)

今まで20か国以上の人たちと様々な形で交流を続けてきた光田さん一家。シコンさんとの生活も「ささいな文化の違いなどを新しい発見として楽しんでいます。」

体調を崩していたおばあちゃんも「この子がいると元気になる」とおっしゃっています。



# 18期生

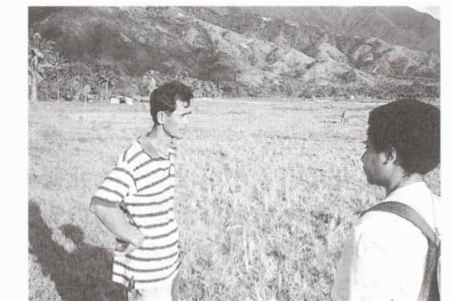
## 『はじめは友達から』- フィリピンC.O. ツアー報告 -

### フィリピン帰国研修生短信

#### エディーさん(99年度)

帰国後、水牛とヤギの糞を使った堆肥作りに成功。米、野菜ともに完全有機栽培でがんばっていましたが、昨年8月の大洪水で、田畑が水につき、作物はほぼ全滅してしまいました。

「今年こそは、おいしいお米や野菜を作って、村の人達に農業や化学肥料を使わないでもやっていけることを見せたいです。」と言っていました。



自分の田んぼについて語るエディーさん

#### ミノさん(96年度)

野菜は唐辛子、トマト、なす、豆、サツマイモを栽培。お米は在来種と高収量品種を1種類ずつ作っています。昨年は灌漑がうまくいかず、収穫量はやや少なめとのこと。

化学肥料、農薬は徐々に使用量を減らしていて、「最終的には使わな

くてもやっていけそう」と話していました。



畑にて息子さんと

#### ヨリーさん(93年度短期)

ミノさんや妹の子供の世話で忙しくしています。96年までSAFRUDIで働いていたので、今回も保健・栄養プログラムについて話してくれました。

今年はいとこの出産で忙しく、農業があまりできていないようですが、来年は数種類の在来種を全て有機栽培で作りたくと考えています。

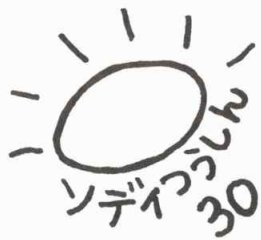


親戚一同とハイ、ポーズ



有機農業グループの説明を聞く





年末スタディツアー

毎年恒例の北タイスタディツアーでムシキーとメーサリアンのカレンの女性グループを訪ねました。それぞれのグループから1年分の布の買付けをし、17期研修生のベリポーさんとポーディさんの帰国後の活動状況を聞き、メンバーの人達とミーティングを行いました。

ムシキーのベリポーさんは、拠点チェンマイに置き、ムシキーとチェンマイを行ったり来たりしながら、グループの活動を続けています。グループのメンバーは、「ミシンを教えてもらえることがうれしい」「布の悪いところを指摘してくれる」「日本での生活や社会問題も聞けるので良い」など、ベリポーさんが帰国してからの感想を話してくれました。



ムシキーの今年の布は、全体的に多様な色と柄が出ていました。糸の始末や模様位置など細かいところに改善の余地はありましたが、技術が上がっているようです。加工品に関しても、ベリポーさんの研修の成果が見られ、かばんやポーチ、筆入れなど品数が増えました。また、他のメンバーにも加工技術を教えている様子を見ることができました。

メンバーは自分の売上の10%をグループに出し、そのうち半分は教会への寄附、あとの半分はグループ運営の経費に当てる、というシステムを確立しています。グループ活動として10年続いたということで、技術面と同様に、グループ運営面でも向

上しているという印象でした。これからのについては、「今までは村の外に女性が出て行くことはなかったが、今は少しずつ外に出て行く人が増えており、これからはもっとそのような機会が増えていくと思う。その人たちが少しずつ、外の人にカレンの布を広げていこう」ということになりました。すでにこの試みは始まっているようで、PHDだけが売り先ではなく、販路を広げるという動きが出てきています。

メーサリアンのポーディさんは実家であるメートツ村に住み、メーサリアンのグループの中心であるシードンチャイ村に通い、活動を続けています。



こちらでは買付けの段階で同じ色がたくさんあり、PHDの買付けの後、大量の布が余ってしまうという問題が起きました。これらの問題は、ミーティングで色分担をした時に欠席していた人たちの染めた色が重なってしまった、作れば作るだけPHDが買ってくれると思う人がいた、などの理由から生じたようです。また、ミーティングに出席しなかった人の売上げが高かったなどの不満も出ました。

グループとのミーティングでは、布グループの呼びかけをした元研修生のプリチャーさんと奥さんのチャントナさん、ポーディさんとメンバーの人たちで、もう一度PHDの目的とグループで活動していくことの意味を考え、話し合いました。グループとしてどのように活動をしていくか、メンバー間で格差が出ないようにするにはどのようにしたらよいかなど、時間をかけ話し合いを重ねる必要があることを確認しました。

グループのメンバーからは「ブンシーさんの帰国後、ポーディさんとブンシーさんが連携をとり、みんな

で少しずつこの問題に取り組んでいきたい」と前向きな意見が出てきました。

PHDはグループ活動を基本にした自立を応援していくことを村の人と確認し合いながら、村の人の状況と速度に合わせ、あせらず、しかしより良くなるよう進めていきたいと思っています。

展示販売会を行いました

2月23日から3月2日までJR神戸駅の地下街デュオ神戸にあるふれあい工房で展示販売会を行いました。年末タイツアーで買付けをして、いちばん種類が揃っているこの時期に、たくさんの方に見ていただくことを目的に行いました。新聞社の取材も入り、思った以上にたくさんの方に見ていただくことができました。さらに事務所まで布を見に来てくれた方もいました。期間中、ソディのメンバーがお客さんに布グループの説明やカレンの布の魅力を伝えるために、お店に入りました。カレンの布を生活の中にどう取り入れていくかを見てもらうために、ディスプレイにもひと工夫しました。ふれあい工房のスタッフの方は「草木染めはやさしい色でとてもいい。カレンの布は展示販売会という形をとって、じっくり見てもらう方が布の良さが伝わる」とおっしゃって下さいました。



お楽しみ

PHD設立20周年記念事業の際に記念品を用意しようと準備を始めました。PHDらしくて、手にして嬉しいものと考えた時、それはカレンの布。ソディのメンバーを中心として、そこにカレンの布や活動に興味があるボランティアの方が加わった、記念品チームが結成され、動き始めています。何が出てくるか、乞うご期待！

20周年

3月24日、実行委員会スタート

20周年

◆10月6日(土)、7日(日) アジア・南大平洋地域づくりシンポジウム 「共につながり、共に生きる私たち」

神戸市北区・神戸市シルバーカレッジ

海外より元研修生代表、カウンターパート代表、また国内研修指導者、NGO/NPO関係者、会員、協力者を集めて、20年をふりかえり、これからの活動を考える2日間。

◇10月6日 13:00~19:30

- ▼基調講演
▼パネルディスカッション
▼会員交流パーティ
▼コンサート

◇10月7日 9:30~16:00

- ▼国際協力の現場を考える4分科会
▼足元の行動を考える4分科会
▼総括ディスカッション

上記行事への参加はもちろんのこと、多くの方を迎えに行う行事の運営を担って下さるボランティア大募集。会報増刊号の編集、分科会の企画、パーティのアジア料理部隊、当日の各パートの担当等に。詳しくはお問い合わせを！

関連行事

◇9月20日(土)、30日(日)

農文塾リユニオン

兵庫県篠山市・たんば農文塾

PHDの研修がスタートした思い出の農文塾にネパールからの研修生バートさん(1期)、ラダさん(2期)を迎えての一泊二日。

◇10月8日(日)

アジア・パシフィック・ユース・

ミュージック・ワークショップ

兵庫県東浦町・あわじ夢舞台

フィリピン、シンガポール、パプア・ニューギニアのプロミュージシャンと日本の若者との音楽を通じた交流。

◇10月14日(日)

ワン・ワールド・フェスティバル

大阪市・大阪国際交流センター

元研修生の帰国後の村づくりの取り組みと日本からの支援の意味を考えるシンポジウム

◇その他、兵庫県国際交流協会、頌栄人間福祉専門学校、などにおいても行事を調整中。

PHD NEWS

□会費・ご寄付寄託状況

Table with 3 columns: Month, Number of items, Total amount in Yen.

以上の通り皆様より多くの会費とご寄付を頂戴しました。皆様のご協に厚くお礼申し上げます。

□第55回神戸新聞社会賞受賞

5月30日、学術や文化、スポーツ、社会活動を通じ、地域社会の発展に貢献した人たちに贈られる標記の賞を当協会がいただきました。20年にわたる草の根の国際協力の活動を評価されてのものです。

新作PHDオリジナルTシャツできました！

シンプルなPHDのロゴ入り

パプア・ニューギニアの写真をプリント



夏のスタディツアー

- ◆ネパール(残席わずか) 7月23日~8月1日 20万円
◆パプア・ニューギニア 7月31日~8月12日 24万円
◆インドネシア 8月21日~8月30日 20.5万円

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載していません。



新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載しておりません。